

東明寺蔵『大般若波羅密多經』について —その素性を巡って—

宇 都 宮 啓 吾

一 はじめに

従来の訓点資料研究においては加点された言語それ自体を研究する方向とともに、その背景とも言うべき加点の場やその過程に関する問題についても注目され、高山寺や石山寺の如き聖教を有する寺社単位での総合的研究や、「一切經」五千数百卷・『大般若波羅密多經』六百卷の如き大部の聖教を単位とした総合的研究、また、個別の聖教についての研究など、多くの研究が存する。今後とも、このような方向での研究は広く進められるべきであり、稿者自身、そのような寺社単位、又、聖教単位での総合的研究を志向しており、本稿もその研究の一環である。

『大般若波羅密多經』（以下、『大般若經』）は、玄奘三蔵訳による一部六百卷の經典で、唐の龍朔三年（六三三）に完成し、日本には僅

東明寺蔵『大般若波羅密多經』（宇都宮）

か四十年後の大宝三年（七〇三）に伝来していることが『日本書紀』〈三月辛未十月条〉において確認できる。『大般若經』は、国家安泰・除災招福等を祈願して奈良時代以降、盛んに書写・読誦・転読されたものであり、その宗派は南都古宗のみならず諸宗派に亘っている。しかし、『大般若經』はそのような利益のための儀式的側面のみを経典ではなく教学的側面からも講読され、その注釈書や音義・辞書等が作成されるなど、重要な經典とされる。その為、『大般若經』の古写本・古版本は極めて多く、日本の文化史上、注目されるべき經典である。

このような認識のもと、従来より多くの先学によって様々な観点から研究が進められているところであり、国語学の観点からは『大般若經』の書写とその加点の問題が日本漢字音史や漢文訓読史の解明の上で注目されるところである。そのため、今後とも資料の発掘と、新たな観点からの研究が期待されるものと思われる。

東明寺蔵『大般若波羅密多經』（宇都宮）

京都府相模郡笠置町の飛鳥路東明寺には五百八十八帖（折本装・紙本墨書）の『大般若經』が伝存している。現在は、三十八帖が奈良国立博物館に、残りの五百五十帖が京都府立山城郷土資料館に寄託されている。奈良国立博物館に寄託されている三十八帖については、戦前の奈良帝室博物館による調査の際に寄託されて以来のもので、田中塊堂氏の『日本写経綜鑑』において巻第四百一の奥書（奈良時代書写・後述）が紹介され、その解題として「この経は東明寺に三十八巻現存するものでその内巻四百一の一巻にのみこの奥記がある」との記述が記されている。この解題によって現在に至るまで東明寺蔵『大般若經』は「奈良国立博物館寄託の現存三十八巻の写経」として引用されることが多い。しかし、実際には、現存五百八十八帖で、数次の補写・補修等を重ねた取り合わせ本であり、その中には奈良朝写経や訓点資料が存するなど、写経文化史上、又、国語学上において注目すべき写経を含み、全体的な把握が望まれるものと思われる。

そこで、本稿では東明寺蔵『大般若經』の書写時期を踏まえた上で、加点の施された経巻の検討を行ない、あわせて、本『大般若經』の素性についての考察を試みたい。⁽⁴⁾

二 東明寺蔵『大般若經』の書写

前述の如く、東明寺蔵『大般若經』は数次の補写や補修の重ねられた取り合わせ本であり、その書写は奈良時代から室町時代までのもの

であり、その時代内訳は次の図の通りである。

種別	年代	年号	刊・写の別	員数	備考
A1	奈良時代	天平十五年	写本	一帖	
A2	奈良時代		写本	六帖	
A3	平安時代前期		写本	二五帖	
A4	平安時代中期		写本	二二帖	
B1	平安時代後期		写本	三九〇帖	朱区切点あり
B2	平安時代後期		写本	七七帖	朱区切点なし
C1	鎌倉時代前期		写本	七帖	
C2	鎌倉時代後期		写本	六帖	
C3	南北朝期		写本	二帖	
C4	室町時代前期	応永二十三年	写本	九帖	
D	室町時代前期		版本	四三帖	

右の図を踏まえた上で、各時代の書写について述べていく。⁽⁵⁾

二・一 奈良時代の写経

奈良時代の書写と考えられる『大般若經』としては、まず、前述の『日本写経綜鑑』にも紹介されているA1の巻第四百一が挙げられる。その奥書は以下の通りである。

山田方見住肥後國史生而始天平十五年歲次
癸未八月廿九日於合志郡以東山裏在井出

原之禪房六見母之願所奉寫

書寫師建部君足國

右の奥書によれば、肥後国の史生であった山田方見が天平十五年に同国合志郡東山裏井出原の禪房で母の所願によって書寫師建部足國に『大般若經』を書寫させたものであることが知られる。本書はやや小振りの謹嚴な筆致で書寫され、奈良時代の地方寫經の遺品として注目される。

この他、本書と同筆と覺しい『大般若經』は存しないが、奈良朝寫經としては、A2の寫經として天平十五年寫經よりやや肉太な文字で書寫された寫經が六帖存し、それらは奈良時代後期の書寫と考えられる。

二・二 平安・鎌倉時代の寫經

平安時代の寫經と覺しいものはA3からB2までの如く平安時代前期から後期まで幅広く存している。そのうち、平安時代の奥書の存するものとしては、次の如き卷第三百三十八の延久二年の校合奥書のみである。

延久二年七月廿五日一校了 行□

右の奥書から延久二年（一〇七〇）に校合されたことが知られ、その書寫自体も同時期のものと考えられる。平安時代書寫の『大般若經』のうち、平安時代の奥書の存するものは右の如きであり、A3の平安

東明寺藏『大般若波羅密多經』（宇都宮）

時代前期（9世紀頃）二十五帖、A4の平安時代中期二十二帖、平安時代後期（院政期）書寫としてB1の三百九十帖とB2の七十七帖が存する。このうち、B1の平安時代後期（院政期）書寫の『大般若經』が量的にも多く、東明寺藏『大般若經』の母胎と考えられる。

また、このAからB1までの寫經には後項で改めて検討するが、次の如き奥書が間々存し、本『大般若經』が本来は大和国忍辱山円成寺の鎮守經であったことが知られる。

。興福寺別院四恩院本ニテ加忍辱山新本交點了 一交了 慶尊

（卷第二百三十五）

。以四恩院勝本校点了 忍辱山鎮守御經也 栄実

（卷第二百四十六）

一方、B2の寫經は、B1の寫經と同じく平安時代後期の書寫ではあるが、紙背に花押や黒印の存する点やAからB1までの寫經に存する校合・加點奥書が存しない点から、B1の寫經とは區別すべきものと考えられる。

鎌倉時代の寫經としては、C1の鎌倉時代前期書寫の七帖とC2の鎌倉時代後期書寫の六帖のみであり、孰れも奥書が存せず、書寫年次を確定するには至らない。

二・三 南北朝・室町時代の寫經

南北朝・室町時代の寫經については、奥書の存するものが多い。

まず、南北朝期の写経としては次の如きC3の写経の奥書が存する。

于時文和二年^{癸巳}損失分書入之畢

信楽庄多羅尾郷

（卷第二百九十六）

右の奥書によれば文和二年（一二五三）に近江国信楽庄多羅尾郷において忍辱山に存した『大般若経』の損失分の補写が行なわれていることが知られる。

即ち、本『大般若経』は南北朝期には大和国忍辱山円成寺より近江国信楽庄多羅尾郷に移され、損失分の補写が行なわれていることになる。本『大般若経』が信楽庄多羅尾郷の執れに移されたかについては明確にし難いが、その六十年程降る奥書に、C4の写経として卷第二百八十九に次の如き奥書が存し、信楽庄多羅尾郷平楽寺のことかと考えられる。『大般若経』が大和国忍辱山円成寺から近江国信楽庄多羅尾郷に移されたことについては、この「近江国信楽庄多羅尾郷平楽寺」の奥書が、AからB1の写経、即ち「忍辱山」本に注記されている場合が存することから確認できる。

于時應永廿三年^{丙申}五月十四日近江国信楽庄多羅尾郷平楽寺公用
也 筆崇
（卷第二百八十九）

また、右の奥書の応永二十三年（一四一六）には同郷平楽寺の僧崇によって大がかりな補写・補修が行なわれている。

忍辱山円成寺から信楽庄多羅尾郷平楽寺に移された本『大般若経』も、嘉吉三年には次の奥書の如く竜泉寺において修復が行なわれている。

る。

此經于時嘉吉三年夏之比二百卷之分於龍泉寺修幅之

（卷第二十五）

そして、現在の飛鳥路東明寺に移された時期は明確にし難いが、次の奥書から天文十八年（一五四九）には飛鳥路東明寺に存したことが確認できる。

于時天文十八年^{己酉}於飛鳥路宮寺信讀畢 良澄敬□（卷第六百）

右の奥書の飛鳥路宮寺とは天神社（現在の天照御門神社で、東明寺の隣に位置する）の神宮寺としての東明寺のことと考えられる。

以上、東明寺藏『大般若経』の伝来の流れとその書写について概要を述べてきた。このことを踏まえた上で、加点の施された経巻の検討を個別に行ない、あわせて本『大般若経』の素性についての考察を進めていく。

三 忍辱山における加点

奈良時代から平安時代後期（院政期）までの写経、即ち、AからB1までの写経には先にも触れた次の如き校合・加点奥書が間々存し、本『大般若経』は本来、大和国忍辱山円成寺の鎮守経たる『大般若経』であったことが確認できる。

。興福寺別院四恩院本ニテ加忍辱山新本交點了 一交了 慶尊
（卷第二百三十五）

。以四恩院勝本校点了 忍辱山鎮守御経也 栄実

(卷第二百四十六)

又、奥書から知られる『大般若経』の校合・加點時期については、次に示す卷第五百三十九・卷第五百五十九の奥書からその加點時期が天福二年(一二三四)であることが知られる。

。天福貳年孟秋下旬之比校点了 忍辱山 (卷第五百三十九)

。天福二年孟秋下旬之比重校了 堯藝

以四恩院勝本校点了 忍辱山之 栄実 (卷第五百五十九)

即ち、本『大般若経』の母胎となった『大般若経』は大和国忍辱山円成寺に新たに施入された鎮守経として、天福二年(一二三四)に興福寺別院であつた四恩院の勝本を用いて校合・加點の行なわれたことが知られる。

この忍辱山円成寺の鎮守の『大般若経』として加點された天福二年(一二三四)は『忍辱山知恩院縁起』⁶⁾によれば、忍辱山円成寺内に存する鎮守の春日社の建立された安貞二年(一二二八)の六年後に当たっている。忍辱山円成寺の鎮守の春日社は現存最古の春日造の神殿として従来より注目されるものであり、春日神主の大中臣時定の建立と伝えられている。本『大般若経』が忍辱山円成寺の鎮守経であり、同春日社が忍辱山円成寺の鎮守社であること、また『大般若経』と春日社との密接な関わりから考えるならば、忍辱山円成寺の『大般若経』は同寺の鎮守の春日社において鎮守経として取り揃えられ、安置された

東明寺蔵『大般若波羅密多経』(宇都宮)

ものと考えられる。

四 卷第五百七十八の訓読

次に、本『大般若経』の素性を知る上で重要と考えられる加點資料の卷第五百七十八について検討する。

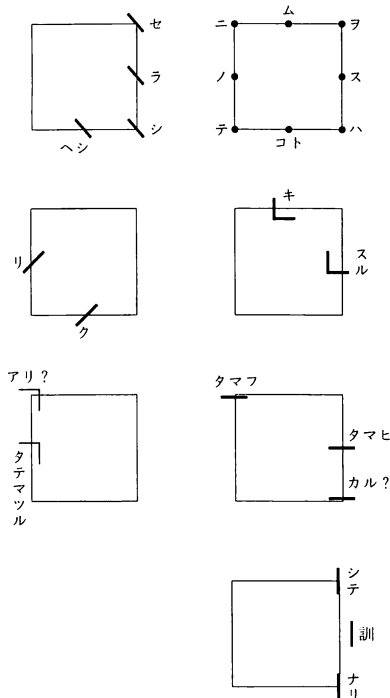
卷第五百七十八は、本『大般若経』の中で唯一ヲコト点が施されており、その素性自体も注目すべき事象を含んでいる。

本書は、縦22・7 cm、横9・1 cmの折本装(もと卷子本で18紙・47折)の経典である。外題は雲英引の題簽(江戸時代の後補)に墨書で「大般若波羅密多経 卷第五百七十八」、首題・尾題共に「大般若波羅密多経 卷第五百七十八」とある。

本文はその書風から9世紀後半頃の書写と考えられ、訓点には平安時代中期(10世紀頃)と覚しい白点の区切点、白点より若干時代は降るものの11世紀後半頃の朱ヲコト点と仮名点、院政期から鎌倉時代後期にかけての数種の墨筆の字音が存する。又、本書には奥書部分が改装の際に切断されており、書写・加點の具体的な事情を明らかにし難い面は存するが、忍辱山円成寺で加點されたと覚しい朱筆の区切点も存し、本書が当時忍辱山円成寺の鎮守経であつたことが確認でき、先に述べたA3に属する写経である。

ここでは、本書の訓点の内、11世紀後半頃の朱点に注目して、その素性を検討したい。

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ロ	ラ	ヤ	マ			タ		カ	ア
人	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
人				ミ	ヒ		チ	シ		ハ
給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル		ム			ツ	ス	ク	ウ
奉	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ					ケ	
シテ	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
				モ			ト			オ



四・一 訓点の素性

本書に施された訓点の仮名字体とヲコト点とを上に示した。

本書は仮名付訓こそ多くないが、ヲコト点は詳密で、大体読み下し可能となる。また、片仮名字体の中に、「寸(ス)・「(ミ)」の如き古い仮名字体が存し、本書は11世紀後半頃の加点と考えてよいように思われる。

この「寸(ス)」の字体については、11世紀における片仮名字体の伝承の観点から南都東大寺三論宗系統の指標とされることが小林芳規博士によって指摘されている⁽⁷⁾。又、「(ミ)」もその初見は平安時代初期の前半期であり、平安時代後期にまで主として南都古宗に伝承され、興福寺法相宗の喜多院点の点本に多く用いられているが、東大寺(三論宗)点の中においても用いられている片仮名字体であるとされる⁽⁸⁾。

このような片仮名字体の観点から考えるに、本書の加点は東大寺三論宗の僧の手になるものと予想できる。

そこで、この問題をヲコト点の観点から検討していくこととする。上に示したヲコト点は、左隅から右回りにその四隅が「テニヲハ」となっており、第五群点に分類される。しかし、左辺の中央に星点「ノ」があるなど、点図集に該当するものが無い。

点図集に収録されていない第五群点の資料については、築島裕博士が使用者のグループによって、天台宗延暦寺系統・真言宗仁和寺系統・真言宗石山寺系統・南都東大寺系統・俗家系統の五つに分類して述べ

られている⁽⁹⁾。本書は先に述べた如く、片仮名字体から東大寺系統であるとの見通しを立てたところであり、又、本書が忍辱山円成寺の鎮守経であったことから南都との関係が窺われ、築島裕博士の述べられている南都東大寺系統の資料と共に検討してみる。

築島裕博士は、東大寺系統の加点資料として以下の六点の資料を挙げておられる。

①地蔵十輪経卷第十 一帖 知恩院

白点

本文内容から南都古宗の中で加点された可能性はある。

②浄名玄論卷第一 一卷 京都国立博物館

白点

(奥書) 慶雲三年(七〇六)十二月八日記
本文内容から南都での加点の可能性が高い。

③仏説弥勒下生経 一卷 西福寺

白点

本文内容から南都関係の加点本の可能性はある。

④成唯識論卷第十後序 一卷 石山寺

角点

角点以外に白点が加点され、この加点奥書から白点が東大寺平能の資になる東大寺点であることから、角点も東大寺で用いら

東明寺藏『大般若波羅密多經』(宇都宮)

れた可能性が大きい。

⑤大般涅槃経後分 一帖 青蓮院吉水藏

白点

(奥書) 嘉承三年(一一〇八)八月七日奉寫了 美州ノ広貞

(別筆) 永久二年(一一一四)正月二十六日付東大寺東南院已

講ノ之本奉点了

東大寺已講は三論宗の学僧である覺樹(一〇八一―一一三九)の本を利用していることが奥書より知られる。

⑥三種悉地陀羅尼法 一帖 醍醐寺

朱点・墨点

(奥書) 寛治七年(一〇九三)十月廿四日於府僧房書了ノ末学

沙門永珍之本

(別筆) 康和三年(一一〇二)八月十六日於上醍醐北尾房書續

了ノ極大秘書云々

前半に第五群点、後半に東大寺(三論宗)点を用いている。

以上の如き例から、築島裕博士は「用例が少ないため、その事情は明でない」とされながらも、「唯、成唯識論古点以下の三点は、何れも東大寺点と関係があり、東南院は東大寺の塔頭で、貞観十七年(八七五)に聖宝の建立した薬師堂に端を発し、三論修学の寺として発展した⁽¹⁰⁾」と付言されている。つまり、点図集に収録されていない第五群

点の中には、東大寺、特に東大寺東南院との関わりから窺われるように、三論宗と関係の深い一群のあることが予想される。

この点においても巻第五百七十八が右の一群に属し、三論宗の僧侶の手になる加点であることに矛盾は存しない。すなわち、巻第五百七十八は、片仮名字体のみならず、ヲコト点の系統からも三論宗の僧侶の手になる加点と考えられる。⁽¹¹⁾

四・二 『大般若経』訓読としての位置

以上の検討から、本書のヲコト点が第五群点で、東大寺三論宗の僧の手になる加点であることが予想された。このことを踏まえた上で、『大般若経』訓読に於ける本書の位置についても付言する。

『大般若経』の加点本については、古写本・古版本が多いにも関わらず、加点本が少なく、又、その多くが字音点であるなど、訓読された加点本については量的にも極めて少なく、訓読史上の面からも注目されている。そのような点から、従来『大般若経』の古点本については諸氏によって言及されている。それらを含めて、管見に入る『大般若経』の古点本を掲げ⁽¹²⁾、そこから本書の訓読史上の位置付けを考えてみたい。

- 1、慈光寺蔵本 貞観十三年（八七二）書写 墨点（院政期加点）
天台宗寺門派による加点（推定）

- 2、石山寺蔵本 平安時代中期書写 白点（天尔波留点別流）
天台宗延暦寺系による加点（推定）
- 3、反町厚三氏蔵本 神龜五年（七二八）書写
白点（平安時代中期加点 喜多院点）
興福寺法相宗による加点
- 4、安田八幡宮蔵本
鎌倉時代書写（建保三年（一二一五）・寛元二年（一二四四）の校合奥書）
墨点（鎌倉時代中期加点 字音点）
平安時代書写 朱点（康和四年点 仮名・東大寺点）
永意（興福寺の法流も学んだ真言宗小野流の僧か）の加点
- 5、東寺蔵『大般若経三十二相好八十種好』 一卷
平安時代後期書写 朱点（喜多院点・仮名）
興福寺法相宗系の僧による加点
- 6、国会図書館蔵本 延暦二年（七八三）
朱点（院政期末または鎌倉時代初期頃加点 声点・字音点）
- 7、石山寺蔵本 一帖 平安時代中期書写
角点・朱点・墨点（院政期加点 字音点）
- 8、大東急記念文庫蔵本 一帖 院政期書写
墨点（鎌倉時代加点 字音点）
- 9、山形県遍照寺蔵本 一帖 寿永二年（一一八三）書写

- 朱点(仮名・声点・喜多院点)
興福寺法相宗系の僧による加点点
- 10、金剛輪寺蔵本 一卷
朱点(院政期加点点 字音点・声点)
- 11、薬師寺蔵本 一帖 院政期・鎌倉時代初期書写
朱点(声点)
薬師寺伝来と考えられる。
- 12、東京大学国語研究室・大東急記念文庫蔵本
建暦二年(一二一二)から貞応三年(一二二四)の書写
序文(和読の訓点)
朱点(建長六年(一二五四)加点点 声点)
墨点(建長六年(一二五四)加点点 字音点)
- 13、山梨県法善寺蔵本 鎌倉時代書写(建長六年(一二五四)の校
奥書あり)
墨点(字音点・仮名点)
- 14、興聖寺蔵本 院政期書写本
朱点・墨点(院政期・鎌倉時代初期加点点)
興福寺法相系の僧の手になる加点点
- 15、京都妙蓮寺蔵本
墨点(仮名点 鎌倉時代加点点)
- 16、小野神社蔵本 院政期書写
東明寺蔵『大般若波羅密多經』(宇都宮)
- 朱点(院政期加点点 東大寺点・仮名点)
17、生駒市長弓寺蔵本 院政期から鎌倉時代の書写
朱点・墨点(院政期・鎌倉時代 字音点・訓読は仮名点のみ)
- 18、檀原市保寿院 院政期書写
ヲコト点(喜多院点)
興福寺法相系の僧の手になる加点点
- 19、室生村大野寺蔵本 院政期から鎌倉時代の書写
字音点(朱点・墨点 鎌倉時代後期・南北朝期加点点)
訓読(墨点 院政期・鎌倉時代加点点 仮名点のみ)
- 20、大蔵寺蔵本
字音点(朱点・墨点 声点・仮名点)
訓読(朱点 喜多院点)
- 21、葛尾観音寺蔵本 鎌倉時代書写
訓読(朱点・墨点 喜多院点 鎌倉時代中期加点点)
- 22、長谷寺蔵本 鎌倉時代書写
墨点(仮名点 鎌倉時代中期加点点)
- 23、天川神社蔵本 鎌倉時代書写
墨点(仮名点 鎌倉時代加点点)
- 24、興福寺勸学院本 鎌倉時代書写
墨点(仮名点 鎌倉時代加点点)
- 25、下部神社蔵本 鎌倉時代書写

墨点（仮名点 鎌倉時代加點）

26、架蔵本（大和国藤井庄本） 院政期→鎌倉時代書写

朱点（声点・句切点 鎌倉時代加點）

墨点（字音点 鎌倉時代加點）

弘暁（興福寺法相宗系の僧）の手になる点

これらの加點資料を検討するに、東明寺蔵本の如き第五群点の資料は未だ見出されていない。また、その訓読の問題については、築島裕博士がその御論の中で次の如く述べておられる¹³⁾。

。平安時代における大般若経は、大部分は本文の書写のみであって訓点を加えたものは希であり、又、その訓点には、訓読の注記と字音直読の注記とが存したが、訓読の注記には、恐らく興福寺の流れで赤穂 照聖人などの訓説が専ら行われて、法相宗・真言宗などの間に伝承され、又、字音直読の点は、多分天台宗と法相宗とがあったが、後者は恐らく法相宗の真興の説が主として伝承され、

。これら諸本の加點について見ると、その多くは平安時代後半から起り、巻第一の巻首に載せる大唐三藏聖教序の部分で訓読した例が多く、本文は大多数が字音点であること、訓読に関する識語に興福寺が見えること、訓点が圧倒的に多いことなどから、この経の訓読は法相宗興福寺などを中心として行はれたことなどを推定

し得るであらう。

このような点からすれば、従来知られる『大般若経』の訓読は法相宗・真言宗の訓読を中心とし、本書の如き東大寺三論宗の僧による訓読の具体的な例は本書以外には見出せず、『大般若経』訓読史上において注目すべき資料であると考えられる。

五 忍辱山円成寺への施入

前項までにおいて、本『大般若経』の素性を検討する上で注目すべき事象について個別に検討してきた。これらを総合的に検討し、本『大般若経』の素性について考えてみたい。

既に述べた如く、本『大般若経』の母胎については、AからB1までの写経であり、忍辱山円成寺の鎮守経として新たに施入され、天福二年（一二三四）に加點・校合されたものであった。そこで、この忍辱山円成寺の鎮守経がどこから施入されたかが問題となる。

忍辱山円成寺鎮守経と考えられるAからB1までの写経には院政期のものと考えられる同種の墨点（字音点・声点・区切点 但し、区切点の一部）が付せられており、院政期時点において、すなわち、忍辱山円成寺に施入される以前にはこれらが一具であったものと考えられる。そして、先に検討した巻第五百七十八も同様の院政期加點の墨点が存しており、又、書写時期がA3であることから、忍辱山円成寺施入以前の二具に属するものであることが知られる。この巻第五百七十

八を手懸かりに考えるならば、本書が東大寺三論宗の僧侶の手になる加点であることから、それを含む一群自体も東大寺三論宗周辺を出自とするのではないかと予想される。

この点については、この時期における忍辱山円成寺と東大寺との密接な関係からも窺われるものと思われる。11世紀前半に忍辱山円成寺開基の命禅は東大寺で法相宗を学んだ寛空の弟子であり、12世紀半ばに忍辱山を再興して忍辱山僧正と称せられた寛遍は東大寺第80世別当になっている。又、彼の法流は真言宗忍辱山流と称せられ、『仁和寺諸院家記』・『東大寺別当次第』によれば、定遍・兼豪・定豪・定親・定済と師資相承され、兼豪を除いては、孰れも東大寺別当に補せられ、忍辱山鎮守経施入当時としては、定豪が安貞二年（一二二八）に、定親が仁治二年（一二四一）に東大寺別当に補せられている。更には、定豪は三論宗の寺として発展した東南院と関係が深く、又、定親・定済は三論宗と真言宗との兼学であることが確認できる。

このような忍辱山円成寺と東大寺との関係を考えるならば、忍辱山鎮守経の施入に際して、東大寺、とりわけ東南院の如き三論宗周辺から移された可能性が高いものと考えられる。

つまり、本『大般若経』は、その出自を東大寺東南院周辺と想定でき、そこから忍辱山円成寺の春日社へと施入され、始めに述べた如き経緯を経て飛鳥路東明寺へと伝来したものと考えられる。

六 おわりに

以上、東明寺蔵『大般若経』に関して、その加点の施された経巻を手懸かりとしながら、その素性について検討してきた。

本『大般若経』は、写経文化史上、又、従来報告されていない訓点資料の存在など、それ自体が重要な価値を有するものと考えられるが、そのみならず、その伝来の過程を考えることで、その背景や教学上の交流に関する問題など、様々な問題を考える視点を提供するものと考えられる。

訓点資料の研究は、訓点というツールを手懸かりとすることによって、僧侶や聖教・教学などのネットワークを解明することが可能であり、国語学のみならず、国文学や歴史学への知見を提供することが期待される。今後は、そのような認識のもと、幅広い観点から訓点資料研究を進めていきたい。

註

- (1) 高山寺典籍文書総合調査団編「高山寺資料叢書」・高山寺文化財総合調査団編「高山寺の研究」の如き諸所の研究が存する。
- (2) 近年では、京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』（平10・3）等、聖教の調査が行なわれている。
- (3) 主要なものとして以下のものがある。
 - ・「天台宗寺門派実相院における典籍・文書の基礎的研究」（文部省科学研究・総合研究A）
 - ・「興聖寺一切経における訓点資料について―その素性を巡って―」（『鎌倉時代語研究』23 平12・8 刊行予定）他
- (4) 稿者は京都府教育庁文化財保護課による、本『大般若経』調査の一員として調査に当った。本稿はその書誌的調査の結果に基づいて考察を行った。
- (5) 本経の調査については、既に笠置町教育委員会による調査（昭61）が存し、その概要については西山厚「飛鳥路東明寺の大般若経について」（第三回 観光と歴史文化講座（笠置町の文化財・古文書より）資料…61・11・9 笠置町・笠置町教育委員会）の紹介が存する。書写の問題については、西山氏の紹介と重なる部分が存するが、此度の調査で明らかとなった部分も存し、又、本『大般若経』の素性を述べる上で必要と思われる為、改めて紹介させて頂いた。
- (6) 『大和古寺大観 第四巻 新薬師寺 白毫寺 円成寺』（昭52・2 岩波書店）を参照。
- (7) 「十一世紀における片仮名字体の伝承」（『春日和男教授退官記念論文叢』昭53・11 桜楓社）
- (8) 前掲小林論文。
- (9) 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』第二部第三章第二節「第五群点附、智證大師點」（平8・5 汲古書院）
- (10) 前掲築島著書・同所。
- (11) 訓法の問題については、別稿（『大谷女子大学紀要』35 平13・3）において述べる。
- (12) 以下の資料を参考とした。
 - ・築島裕「大般若経の古点本について」（『松村明教授古希記念 国語研究論集』昭61・10）
 - ・築島裕「大般若波羅密多經の古本小考―奈良時代・平安時代の写経とその加点点について―」（『東洋文化研究所紀要』第十一輯、財団法人無窮会東洋文化研究所 平3・11）
 - ・滋賀県教育委員会『滋賀県大般若波羅密多經調査報告書』一・二（平1・3 平6・3）
 - ・奈良県教育委員会『奈良県大般若波羅密多經調査報告書』
 - ・滋賀県立琵琶湖文化館『大般若経の世界』（平7）
- (13) 前掲築島論文。

追記

本稿は二〇〇〇年度韓国日本文化学会春季国際学術発表会（平12・4・29）での発表をもとに加筆・修正したものである。発表の席上、水谷隆・菅宗次・檜垣泰代氏より御教示いただいた。調査に際しては、京都府立山城郷土資料館の田中淳一郎氏、又、本『大般若経』の調査員各位に御高配を賜った。記して深謝申し上げる次第である。

なお本稿は、平成十一年・十二年度文部省科学研究費補助金（奨励研究A）による成果の一部である。

（うつのみや・けいご 大谷女子大学助教授）

平成十二年十月二十日 印刷
平成十二年十月二十五日 発行

南都佛教 (第七十九號)

編集 奈良市雜司町 東大寺教學部内
南都佛教研究會
代表 狹川普文

印刷 奈良市三条大路二丁目二一六
共同精版印刷株式会社
電話・奈良㊿二二二一六番

發行 〒630-8211 奈良市雜司町四〇六一
東大寺圖書館
電話・奈良㊿五五一一三番
振替・〇〇九〇〇一八一七六六一